

リスク社会時代の児童文学

第三回 リスク・排除・監視

目黒 強



一 はじめに

リスク社会は、リスクを減らすためにリスク因子のある人々を排除したり監視したりする社会である。このような社会のあり方は、触法少年に向けられるまなざしに現れている。

土井隆義によれば、更生し社会復帰が期待される「非行少年」から、隔離されるべき理解不能な「異常少年」へと、触法少年に対する社会的まなざし¹が変容したという。少年法改正による厳罰化からもうかがえるように、凶悪犯罪を犯した触法少年は社会的に排除されるようになったのである。

触法少年を「異常少年」として排除する社会は、子どもたちの行動を監視する社会でもある。「普通の子どもが突然キレる」のような常套句からもうかがえるように、どの

子どもも罪を犯すリスク因子を抱えているとみなされるリスク社会のもとでは、「異常」を示す兆候は犯罪予防策の一環からモニターされる。防犯のために無数の監視カメラが街頭に設置されているように、リスク社会は監視を伴うのである。しかも、安心と引き替えに、市民自らが監視を求めることがある。存在論的不安に怯える現代人の心性がうかがえよう。

そこで今回は、リスク社会のもとでの排除と監視のまなざしを描いた作品を検討する。

二 排除のまなざし

(一) 加害者家族に対するまなざし

リスク社会における排除のまなざしを描いた作品として、まずは吉野万理子『赤の他人だったら、どんなによかったか。』（講談社、二〇一五年）を取り上げる。